イスラム訴訟手続における証人資格審査の起源について

愛 宕 あもり

(平成18年12月6日受理 最終原稿平成19年1月9日受理)

はじめに

イスラム法の理論では、法的証拠能力を持つのは証人(シャーヒドšāhid)の証言である。証書については、証書そのものの自体には証拠能力がなく、証拠となるのは、証書に署名した証人の証言である。

裁判の際、証人がカーディーqāḍī(裁判官)によって法定の適格要件を満たしていると認められると、その証言は証拠として採用される。カーディーは証言の聴取のみで事実認定を為し、証言に基づいた判決を下す¹⁾。適格性を有した証人の供述は真実であると推定されるからである。

証人が備えるべき法定の適格要件は、「誠実・公平・品行方正な人(アドル adl)」と判断されること、及びその他の要件から成る²⁾。「アドル」であるとの判断はタアディールtā dīlと称され、タアディールのために、カーディーの命令の下に、証人の身辺に関する聞き取り調査が行われる。この証人資格審査(タズキヤ tazkiya)の手続を経た、そして他の法定要件を満たした証人の証言が、法廷での証拠となる³⁾。

証人資格審査は、訴訟手続のなかで最も重要な手続であると言える。

この証人資格審査は、いつ、どのようにして始まったのであろうか。

イスラム司法や公証人制度に関する業績を遺したEmile Tyanは、公証人の起源の研究のなかで、証人資格審査の起源を論じている。

Tyanがnotaireと訳した「公証人」は、シャーヒドšāhid⁴⁾またはアドル adlと呼ばれ、我々の公証人に相当する。彼らは、謂わば職業的な証人で、証書の作成を専門とする。証人資格審査(タズキヤ)の後に、カーディーによって任用された。公証人が作成し署名した証書は、書証としての有効性が確保される。なぜなら、証人としての資格を予めカーディーに承認された者によって作成された証書であるからである⁵⁾。公証人の中には、売買・賃貸・相続・債権などの法的手続の登記以外に、司法行政関係者の一員として法廷に席を占める者もいた。

このような公証人の起源について、Tyanは次のように述べている⁶⁾。

イスラム初期の時代、原告が法廷に申請する証人を証人として認めるか否かは、カーディーの自由裁量的な面に多々左右されていた。その弊害を除くため、証人資格審査が行われるようになった。これは証人としての誠実さを調べるためのもので、その結果によって証言を認めたり拒否したりした。この調査は、エジプトのカーディーのガウスGawṭ b. Sulaymān (135 / 753 ~

愛宕 あもり

140 / 757, 140 / 758 ~ 144 / 762, 167 / 784 ~ 168 / 785年在職) によって創められた。しかし、これは訴訟手続を煩雑にした。同地の次のカーディーのムファッダ爾 al-Mufaḍḍal b. Faḍāla (168 / 785 ~ 169 / 786, 174 / 790 ~ 177 / 793年在職) は、証言の職責を担う人々を、証人としての誠実さを調査した上で選んだ。これが最初の公証人である。ムファッダ爾以後のカーディーもこれに倣ったので、公証人制度はエジプトに定着した。公証人制度はアッバース朝初め、8世紀末に、エジプトで生まれ発展したのである。

以上のTyanの見解には、いくつかの疑問を抱く。

まず、彼の利用した史料がエジプトのカーディー列伝である al-Kindī の『カーディーの書 kitāb al-quḍāt』に限られていることである。ほかに利用できる史料が少ないとはいえ、これ一つを拠り所として、公証人制度の起源をエジプトに求めることは危険である。エジプト以外の地域でも、同じような時期に、公証人制度が生まれていた可能性は否定できない。

同様に、最初の証人資格審査についても、al-Kindīの史料のみに基づいて語ることはできない。

また、公証人制度は、証人資格審査の煩雑さからのみ生まれたのであろうか。公証人が必要とされた理由はそれだけであろうか。

この論考において、証人資格審査をテーマとして取り上げたのは、一つには上述のことからへの検討の糸口としたいと考えるからである。また一つには、従来の証人資格審査への言及は、公証人制度への関心から、その制度の起源を探る視点で扱われていて、証人資格審査そのものの把握が欠けているからである。訴訟手続の発展の過程を知る上で、証人資格審査の実態の把握は重要である。これらの点を踏まえ、研究の端緒として、まずは証人資格審査の起源をめぐって論じたい。

古典完成期のイスラム法学者は、証人資格審査を2種類に分類している。第一は「公開の証人審査 tazkiya al- alāniya」であり、第二は、「秘密の証人審査 tazkiya al-sirr」である [al-Sarāḥsī, XVI, 91 ; al-Māwardī, II, 53]。「公開の証人審査」とは、法廷で、訴訟当事者や裁判関係者や傍聴人の前で、証人の審査をすることで、おそらくカーディー裁判が始まって以来、行なわれてきたであろう。それに対して、ここで扱う証人資格審査は、「秘密の証人審査」に当たり、証人の「誠実・公平・品行方正 adāla」の調査である。

() エジプトにおける証人資格審査

エジプトにおける最初の証人資格審査について述べているのは、前述のように、キンディー al-Kindī の『カーディーの書 kitāb al-quḍāt』である。カーディーのガウス・ブヌ・スライマーン Gawṭ b. Sulaymān al-Ḥaḍramī (168 / 784年没) が、証人を非公開で秘密裡に調査したことを、キンディーは、次のような二つの伝承で語っている [al-Kindī, 361]

[1] 伝承系譜：後者の父 ‘ Ubayd Allāh b. Sā’id Ibn Qudayd al-Kindī

ミスルで証人審査を行なった最初のカーディーはガウス Gawṭ b. Sulaymān であつた。そ

イスラム訴訟手続における証人資格審査の起源について

これはマンスール al-Manṣūr がカリフの時のことである。従前は、表面的に、証人が良い人物と知られているならば、その証言を認め、良くない人物と知られているならば、その証言を認めなかった。その結果、ガウスの時代になると、偽証が増大し広まっていた。そこで、ガウスは秘密裡に証人を調査した。以後、この手続きが取られるようになった。

[2] 伝承系譜：後者の父 (Rabī'a) Ḥalaf Yaḥyā (b. Abī Mú'āwiya) al-Kindī

ガウスは秘密裡に証人審査をした最初のカーディーである。彼以前のカーディーたちは、証人が健全な人と知られていれば、その証言を認め、そうでなければ却下していた。証人が未知の人物であれば、近隣の人々に問い合わせ、良いあるいは悪いの評判に基づいて証言の承認、不承認を決めていた。ガウスに至って、秘密裡に証人を調べた。そして、アダーラ adāla を備えていると彼が判断した証人の証言を認めた (fa-man' uddila' inda-hu qabila-hu)。その後、その証人は市井の人に返る。公証人としての職掌に従事するわけではない。

上記の [1] と [2] の伝承は、ほぼ同様の内容を伝えている。いずれの伝承も、ガウスが証人の秘密審査を行なった最初のカーディーであることを述べている。

両者の相違点を見てみると、[1] では、ガウスによる審査は、それがミスル (エジプト) において最初であること、また時代としてはマンスールの治世であることを明らかにしている。

[2] では、その審査対象が、証人のアダーラ adāla であったことを述べている。アダーラについては後述する。点線下線を施した最後の行は、伝承者の言葉ではなく、キンディーのコメントと考えられる。既に公証人制度の存在している時代を生きているキンディーは、ガウスの実施した審査が公証人指定のためのアダーラの調査ではなく、個々の訴訟で原告が法廷に申請する証人のアダーラの調査であったことを説明しているのである⁷⁾。

ガウスが秘密裡の証人審査を行なった時期は、アッバース朝カリフ マンスール (136 / 754 ~ 158 / 775 年在位) の時代であることは明らかになったが、もう少し、その時期を絞り込むことはできないだろうか。ガウスがカーディー職に在ったのは、135 / 753 年から 144 / 762 年の間と、167 / 783 年から 168 / 784 年の死亡時までの間である [al-Kindī, 356-59, 360-62, 373-76; al-Hakam, 241, 244]。二度目の期間は、マフディー al-Mahdī (158 / 775 ~ 169 / 785 年在位) がカリフであるから、これは除外される。すると、マンスールの即位の年の 136 / 754 年から、ガウスの一度目のカーディー職免職の年の 144 / 762 年までの期間が該当する。しかし、この期間の内、ガウスがエジプトを離れていたときがある。137 / 755 年、アミールのサーリフ Ṣāliḥ b. Alī がエジプトの人士を率いてシリアへ出立したとき、ガウスもその陣中にあった。約 8 ヶ月後、彼はフスタートに戻った。140 / 757 年第 6 月、サーリフの対ビザンツ夏季遠征 sā'ifa にもガウスは従った。不在中の代理としてヤジード Yazīd b. Abd Allāh b. Bilāl が任命された。しかし、約 4 ヶ月後、ヤジードが突然死したため、ガウスは帰国し復職した。このように、途中、ガウスは二度エジプトを離れている。キンディーは、[1] と [2] の伝承を、カーディー代理のヤジー

愛宕 あもり

ドの死後、ガウスがカーディーに復帰した後の箇所に挿入している [al-Kindī, 360-61]。これに従えば、エジプトでの証人秘密審査の始まりは、140 / 758年末から144 / 762年までの間となる。

ガウスの証人資格審査が、エジプトで最初であるのか、それともイスラム史上最初であるのか、彼の独創であるのか、それとも他から影響されたのかを知るために、彼に関する情報を探索すると、以下のことが言える。

ガウスのニスバのハドラミー al-Ḥaḍramī から理解されるように、彼はエジプト征服を経て定住したハドラマウト出身の家系に属している。ウマイヤ朝後半からアッバース朝初期にかけて、エジプトのカーディー職に就いた人物のなかでハドラミーの数は大変多い。ハドラミー最初のカーディー Yūnus b. ‘Aṭayya から最後の Lahī a b. ‘Īsā まで、即ち 86 / 705年から 204 / 819年まで、この期間のカーディー総数 27人中、ハドラミーは 9人いる [al-Kindī, 322-426]。ハドラミー 関とでも言うべき存在の中で、ガウスは、ハドラミーのカーディー Ḥayr b. Nuaym (27 / 120 ~ 35 / 133年在職) の書記となり、Ḥayrの病気が重くなったときには代理として裁判を行い、Ḥayrの免職後、カーディーに就任した [al-Kindī, 355, 356-57]。さらに、ガウスの不在中、彼の代理として彼が任命したヤジードもまたハドラミーであった。

ガウスの父 Sulaymān b. Ziyād b. Rabī a b. Nū aym al-Ḥaḍramī al-Sūrānī (117 / 735年没) はハディースの伝承者である。エジプトに移住し同地で没した教友 Abd Allāh b. al-Ḥārīṭ b. Ġaz ‘ al-Zubaydī (84 / 703又は 85 / 704又は 86 / 705年没) [al-‘Asqalānī, V, 178-79] からの語り手として、名が挙げられている [al-Samī ānī, VIII, 340-42; al-‘Asqalānī, IV, 192-93]。

ガウスの甥 Rabī a b. al-Walīd の名が、キンディーの記述の中に見られる。188 / 802年、アブダッラー・モスクが修築された際、カーディーの al-‘Umarī は、そのモスクのワクフ設定文書の写しをミスの主だった人々に送ったが、Rabī a b. al-Walīd は、そのうちの一人に含まれていた [al-Kindī, 410]。

ガウスの家族について、あと一つ加えよう。キンディーの『カーディーの書』は、多くの資料から収集された伝承が、すべて伝承系譜を具備して編纂されているのであるが、そのうちの一つに、次のような系譜を持つ一連の伝承がある⁸⁾。

ガウスの兄弟 al-Walīd b. Sulaymān 前者の息子 Rabī a b. al-Walīd 前者の息子 Ḥalaf
Yaḥyā b. Abī Mū āwiya al-Tuḡībī

(al-Walīd b. Sulaymān が最初の語り手とならずに、Rabī a b. al-Walīd が最初の語り手となることもある。)

この伝承系譜は、ガウス一族が学問を家業としていたことを示している。

ガウスがハドラマウト出身の家系のエジプト在地的な人で、学識と司法業務によって立つ、エジプトでは由緒ある家柄の出であることが分かる。しかし、彼について知りうることは、以上に尽きる。

イスラム訴訟手続における証人資格審査の起源について

()イラクにおける証人資格審査

イラクにおける証人資格審査の事情はどのようであろうか。ク・ファのカーディー イブン・シュブルマ Abd Allāh b. Šubruma b. al-Ṭufayl b. Ḥassān al-Ḍabbī (72 / 691 ~ 144 / 761年) について、ワキーウ Waqī 及びイブン・サード Ibn Sā d は次のように述べている。

[1] 証人を秘密裡に調査した最初の人物は、Ibn Šubrumaである [Waqī , III, 116]

[2] Ibn Šubrumaは言った。「私は今まで誰もやらなかった三つのことを創めた。第一に秘密の証人調査、第二に証拠の確認、第三に証人の外見的特徴の記録である」 [Waqī , III, 120]

[3] Abd Allāh b. Šubrumaは、彼のために証人を調査する人々をハダーヒド hadāhid と呼んでいた [Ibn Sā d, VI, 245]

これらによって、イブン・シュブルマは、証人に対する秘密審査の創始者であると考えられる。後の時代にサーヒブ=アルマサーイル ṣāhib al-masā il またはムザッキー muzakkī と称される証人調査吏員を、イブン・シュブルマはフドゥフドゥ hudhud (複数ハダーヒド hadāhid) と呼んでいる。フドゥフドゥは鳥のヤツガシラである。この呼称は、証人資格審査の制度のプリミティブの段階を示していると思われる。ただ、このような呼び方をした理由は不明である⁹⁾。

次に、イブン・シュブルマが証人資格審査を行った時期を特定しよう。

イブン・シュブルマは、8世紀前半のク・ファを代表する学者である。スフヤーン・アッサウリー Sufyān al-Ṭawrī (97 / 716 ~ 161 / 778年) をして「我々の法学者はイブン・アビー・ライラーとイブン・シュブルマである」 [Waqī , III, 120 ; al-ʿ Asqalānī, V, 250] と言わしめている。彼とイブン・アビー・ライラー Muḥammad b. ʿ Abd al-Raḥmān Abī Laylā (74 / 693 ~ 148 / 765年) は、前後してク・ファのカーディーとなった。後に、共に獵官運動をも行なった親しい関係にあったようである。当時のク・ファには、アブー・ハニーファ Abū Ḥanīfa (80 / 699 ~ 150 / 767年) がいたが、イブン・シュブルマとは同じ仲間でなかったように思われる。

イブン・シュブルマは、ウマイヤ朝時代後期、イエーメンのカーディー [Waqī , III, 121] またはワーリー [Ibn Sā d, VI, 244] 職に在った。その職を解かれた後、ク・ファに戻り、カリフ ヒシャーム Hišām (105 / 724 ~ 125 / 743年在位) のク・ファ総督ユースフ・ブヌ・ウマル Yūsuf b. ʿ Umar al-Ṭaqafī (120 / 738 ~ 126 / 744年在職) によってカーディーに任命された [Waqī , III, 36, 37] 任命された時期は、120 / 738年である [al-Ṭabarī, III/ II, 1667] ついで、総督はイブン・シュブルマを罷免し、シジスターンに派遣した。後任のカーディーとしてイブン・アビー・ライラーを任命した [Waqī , III, 36, 37] それは、122 / 740年のことである [al-Ṭabarī, III/II, 1717] その後、イブン・シュブルマは、アッバース朝の到来まで官職に就いていない¹⁰⁾。

アッバース朝が誕生すると、イブン・シュブルマとイブン・アビー・ライラーらは新政権に

愛宕 あもり

接近した。初代のクーファ総督となったイーサー・ブヌ・ムーサー Īsā b. Mūsā (132/750～146/763年在職)は、カリフ サッフアーフ al-Saffāh (132/750～136/754在位)やマンスール al-Manṣūr (136/754～158/775在位)の甥にあたり、カリフ位後継者に指名されたこともある人物である。イーサーはイブン・アビー・ライラーをカーディーに任命した。そして、イブン・アビー・ライラーは亡くなるまで、その地位に在った [al-Ṭabarī, III, 72, 75, 81, 84, 91; Waqī , III, 107, 148] 即ち、アッバース朝時代の彼のカーディー職在任期間は、132/750年から148/765年までである。

では、イブン・シュブルマはどのような地位にあったのであろうか。その頃の彼は、イブン・アビー・ライラーらとともに毎夜、総督の許にご機嫌伺いに参上し、そのまま朝のアザーンを聞くこともある、というような暮らしぶりであった [Waqī , III, 79, 104, 120 ; Ibn Sā d, VI, 244] 高名な法学者ゆえに、無官のまま、総督の知遇を得ていたと考えられないわけではない。しかし、そうではないように思われる。アッバース朝以後のイブン・シュブルマの経歴に関して書かれた記述を拾い上げると、次のようである。

[1] 彼は Abū Ġā far によって任じられたサワード al-Sawād のカーディーであった [al-Asqalānī, V, 250]

[2] Īsā b. Mūsā は彼をハラージュ地のカーディー職 qaḍā ' arḍ al-ḥarāğ に任じた [Ibn Sā d, VI, 244]

[3] アッバース家が到来したとき、彼らは Ibn Abī Laylā を元の地位に戻し、同様に Ibn Šubruma も戻した [Waqī , III, 148]

[4] Īsā b. Mūsā は、Ibn Šubruma がシジスターンから戻ったとき、彼をマザーリム maẓālim 職に任じ、Ibn Abī Laylā をカーディー職に任じた [Waqī , III, 124]

[1] に関しては、任命権者をアブー・ジャアファルすなわちマンスールとしているのは明らかに間違い。任命者は総督イーサーでなければならない。

[2] に関しては、「ハラージュ地のカーディー職」とはいかなるものかが問題である。

[3] に関しては、イブン・アビー・ライラーとイブン・シュブルマの双方をカーディーに任じたと解釈してよいのだろうか。そうであれば、クーファに二人のカーディーがいたことになる。それとも、イブン・アビー・ライラーはカーディーに、イブン・シュブルマは別の職務に就いたということであろうか。

[4] に関しては、マザーリム職の名が出ている。

これらの錯綜する記述から、アッバース朝において、イブン・シュブルマがどのような職位に在ったかを決定するのは、大変困難である。しかし、敢えて述べるとすれば、二つのことが

イスラム訴訟手続における証人資格審査の起源について

考えられる。

第一は、イブン・アビー・ライラーはクーファのカーディー、イブン・シュブルマはクーファ管轄下のクーファ周辺地域のカーディーであった、という見解である。その理由は、[1] [2] [3] の記述に拠る。[1] に述べられているサワードの語をクーファ管轄地域と解釈し、[3] の「両人が復職した」ということから導き出される。サワードの語のこのような用例は、たとえば、al-Ṭabarīにおいても、よく見られるところである。「クーファおよびそのサワード al-Kūfa wa-sawād-hā」[al-Ṭabarī, III/I, 124, 142] または「ク - ファおよびその土地 al-Kūfa wa-arḍ-hā」[al-Ṭabarī, III/I, 75, 81, 84, 127, 138] のような表現である。この場合の sawād と arḍ は同義語である。

第二は、イブン・アビー・ライラーはクーファのカーディー、イブン・シュブルマはクーファのマザーリム長官であった、という見解である。それは、[2] [3] [4] に拠る。[2] の「ハラージュ地のカーディー職」を、土地税ハラージュを支払う土地に関わる、特に、税や徴税官に関する訴訟の裁判官職と解釈すれば、これらの訴訟は、多くの場合、マザーリムの扱うところであるゆえに、イブン・シュブルマがマザーリム職に在ったと考えることは可能であろう。[3] からは、両人が裁判に関わる仕事に復職したと解釈する。[4] は、記述どおりである。

この二点の見解の内、後者の方を採りたい。というのは、ク - ファを州都とその管轄地域に分けて、それぞれを裁判管区とすることは考え難いからである。また、イブン・シュブルマはカティーア長官 wālī al-qaṭāf の不正を総督イーサーに進言して罰せさせた、という記述もあり [Waqī , III, 97-98] 彼がマザーリムの職務を預かっていたことは考え得る。

この結果、イブン・シュブルマのクーファのカーディー職在任期間は、120 / 738年から122 / 740年である。アッバース朝では、カーディーにならなかったと考える。それゆえ、イブン・シュブルマは、ウマイヤ朝末期に、証人資格審査を行っていたことになる。

イラクでは、イブン・シュブルマ以後も、証人の秘密審査が行なわれ続けたと考えられる。アブー・シャイバ Abū Šayba Ibrāhīm b. ʿUtmān は、アッバース朝の初め、136 / 754年から158 / 775年までの長きにわたってワーシトのカーディー職に在った。彼を任命したのは、クーファ総督のイーサー・ブヌ・ムーサーである [Waqī , III, 308-12] Waqī は、次のように述べている。

アブー・シャイバの証人審査吏員であったイブン・ビーダーフルムズ Ibn Bī dāhurmuḥ ʿazīz ʿabī Ḥabīb が道を歩いていると、原告の証人と出会った。その男は彼を恫喝した。彼は何も答えず、何も言わずにその場をやりすごし、後でカーディーに告げた。カーディーのアブー・シャイバはその男を呼びつけて叱責した後、3日間拘留した [Waqī , III, 308]

この記述は、アブー・シャイバもまた、証人審査資格の調査を行っていたことを示している。彼は、Waqī において、イブン・シュブルマの言葉の伝承者の一人であり、彼の弟子筋に当た

愛宕 あもり

と思われる。この話は、ワーシトのカーディーとしてその地に赴き、彼が師と同様、証人審査を実施していたことの証左である。

また、アブー・ユースフ Abū Yūsuf (182 / 798年没) にも逸話がある。周知のごとく、彼はバグダードのカーディーに就任するまで、クーファに住んでいた。彼のカーディー就任の正確な年は不明であるが、ともかく、亡くなるまで、カリフのハーディー al-Hādī、ついでラシード al-Rašīd の、バグダード西岸地区のマンスール管区のカーディーであった。その逸話では、アブー・ユースフが、正しく公平である (アドル adl) と認めた二人の人物の名を騙った二人の証人に、当初だまされてしまっていた [Waqī , III, 262]。ここからも、アブー・ユースフが証人審査を行っていた事実を見て取れる。

イラクでは、このように、イブン・シュブルマ以後、証人の秘密審査が行なわれていた。

残念なことながら、イラク、エジプト以外の地域での証人資格審査は不明である。

おわりに

証人資格審査において調べられるのは、その証人にアダーラ adala が備わっているか、すなわちアドル adl なる人であるか否かであった。アダーラは「公平・正義・誠実・美德・高潔・品行方正」という意味を持った言葉であるが、証人審査において、具体的にどのようなことを指しているのだろうか。

法学者 マーリク Mālik b. Anas (179 / 795年没) の意見は、次のようである。

酒を飲む人、利子を食べる者、嘘つきはアドルでない。 [Saḥnūn, V, 202]

マーリクより後の、ハナフィー派の法学者ハッサーフ al-Ḥaṣṣāf (261 / 874年没) 及び彼の註釈者は、次のような者をアドルでないとしている。

路上強盗犯、窃盗犯、男性・女性に対してふしだらな行いをする者、姦通中傷罪の受刑者、酒 ḥamr を飲む者・またはナビーズ nabīd の酩酊者、歌手 (男・女)、葬儀の泣き女・男、賭け将棋をする者、利子 ribā ' を食べる者 [al-Ḥaṣṣāf, 305-306]

嘘つき、あるいは姦通中傷罪の受刑者というのは、証言の本質と関わるが、その他は、倫理的に問題があるとか、もしくはイスラム的価値観から逸れるものである。

マーリクやハッサーフの法意見から、日本語で「誠実・公平・正義」と訳しているアダーラは、「イスラム的価値から判断される誠実・公平・正義」であることが理解される。イスラムの浸透によって付加された価値観である。前述のクーファのカーディー イブン・シュブルマの次のような言葉は、それを表している。

イブン・シュブルマの証人審査吏員によって証人資格を認められなかった男が、「なぜ駄

イスラム訴訟手続における証人資格審査の起源について

目なのか」とイブン・シュブルマに詰め寄ったところ、彼は「あなただけではない。ハダーヒド（前述のように証人審査吏員を指す）が不適格とした部族長クラスの有力者（‘arīf）は、どれほどいることか」と答えた [Waqī , III, 105-106]

これまで、アラブ社会のなかで人々から一目置かれ、人々から尊敬の念を持たれていた人であっても、イスラム的基準に裏打ちされた誠実さが欠けていれば、証人審査に合格できない。

訴訟において証言は最大の要であるが、その証言がカーディーによって認められる人がアダーラを持った人であるとされたことは、訴訟手続のなかにイスラム的価値観が含まれることとなった。

カーディー法廷でシャリーアが適用され、また、訴訟手続の過程にもイスラム的基準が導入された。証人資格審査は、訴訟手続のイスラム化に大きな役割を果たすことになったのである。

註

- 1) 原告の訴を否認する被告は、立場を原告に替え、自らの証人を法廷に申請する。カーディーが証人の適格性を認めると、その証人の証言も証拠である。
- 2) 証人の条件は、「adl」以外、次の如くである。ムスリム、自由人、成年、2人の男性、または1人の男性と2人の女性。ただし、ハッドḥadd刑（姦通・姦通中傷・飲酒・窃盗・追剥）と殺人に対する血の復讐qiṣāṣについては、女性の証人は認められない。姦通罪は4人の男性証人が必要。訴訟当事者の一方と男性父系親族関係にある者、あるいは敵である者は認められない。その他、細則あり。
- 3) イスラム法における証拠については、以下の研究を参照。Tyan E., *Le notariat et le régime de la preuve par écrit dans la pratique du droit musulman*, Beirut, 1945 ; Brunshvig R., *Le système de la preuve en droit musulman, Études d Islamologie*, Paris, 1976, ii, pp.201-19 ; Brunshvig R., “ Bayyina ”, *EI*² ; Schacht J., *An Introduction to Islamic Law*, Oxford, 1964, pp.82-83, pp.192-195, p.198 ; Peters R., “ Shāhid ”, *EI*²
- 4) 個々の訴訟の証人の呼称と公証人の呼称に用語上の区別がなく、ともにシャーヒドshāhidと呼ばれる。
- 5) 取引の際に契約証書を交わすことは『コーラン』において命じられているが [II, 282]、法学者たちはこれを推奨すべき行為と解釈し、証拠はあくまでも証言であった。ただし、前述のように、証人の署名のある証書は、法廷での当該証人の証言が望み得るという点で、補助的な効力を持った。現実には、証書の作成は当然のこととして慣習となっていた。そして、公証人の登場は、書証の有効性を確保したのである。
- 6) Tyan E., *Histoire de l'organisation judiciaire en pays d Islam*, Leiden, 1960, pp.236-42
- 7) エジプトで公証人制度が始まったのは、ガウスの後のカーディーの時代で、ムファッダルal-Mufaḍḍal b . Faḍāla (174H - 177H在職) のときである。 [al-Kindī, 385-386]、ムファッダルの後任のイブン・マスルークMuḥammad b. Masrūq al-Kindī (177H - 184H在職) も公証人の指定を行ない [al-Kindī, 389]、さらに、ウマリ= Abd al-Raḥmān b. Abd Allāh al- Umarī (185H - 194H在職) は公証人の登録簿を設置した。彼は約100人の公証人を指名した [al-Kindī, 294,295-296]
- 8) 校訂者R. GuestのIntroduction, 14-39を参照。
- 9) hudhud (複hadāhid) について、Ibn al-Manzūr, *Lisān al- Arab*, III, 445-446; Wensinck,A.J., “ Hudhud ” *EI*²

愛宕 あもり

参照。『コーラン』XXVII,20-44に、ヤツガシラはソロモンとシバの女王の間の使いとして現れている。Al-Kindīに、「エジプトのカーディー ムファッダル（註（7）既出）は証人審査吏員（サーヒブ=アルマサーイル $\dot{s}$ āhib al-masā il）の職務を置いた最初のカーディーで、その職に彼の書記Fulayḥ b. al-Sulaymānを任命したが、彼はイブン・アルクマリ=Ibn al-Qumarī（キジバトの息子の意）の名で知られていた [al-Kindī, 385]」とあり、証人審査吏員をヤツガシラとかキジバトとか呼ぶことに関連性を感じる。

- 10) 総督ユースフは、ヒシャームを継いだワリード 2 世 al-Walīd (125 / 743 ~ 126 / 744 年在位) によって引き続きクーファ総督に任命され、その職に在ったが、ワリード 2 世の暗殺後に即位したヤジード 3 世 Yazīd (126 / 744 年在位) はユースフを獄死させた。イブン・シュブルマとイブン・アビー・ライラーは失職し、また、クーファがハワーリジュ派に奪われたこともあって、他の仲間とシリアに赴き、官職を求めたが、成功せず、時節を俟つこととした [Waqī , III, 110, 143-144]

引用文献

- al-ʿ Asqalānī, Ibn Ḥaḡar al-ʿ Asqalānī (d.852/1448), *Tahdīb al-Tahdīb*, Hayderabad, 1326H
al-Ḥakam, Abū al-Qāsim ʿ Abd al-Raḡmān b.ʿ Abd Allāh b.ʿ Abd al-Ḥakam (d.257/871), *Kitāb Futūḥ Miṣr wa Aḡbār-hā*, Leiden, 1920
Al-Ḥaṣṣāf, Abū Bakr Aḡmad b.ʿ Amr al-Šaybānī (d.261/874), *Kitāb Adab al-Qāḡī*, al-Qāhira, 1978
Ibn Sā d, Muḡammad b. Sā d (d.230/845), *Kitāb al-Ṭabaqāt al-Kabīr*, 9vols., Leiden, 1917-40
al-Kindī, Muḡammad b. Yūsuf al-Kindī (d.350/961), *Kitāb al-Ulāt wa Kitāb al-Qudāt*, Leiden, 1912
al-Māwardī, Abū al-Ḥasanʿ Alī b. Muḡammad b. Ḥabīb (d. 450/1058), *Adab al-Qaḡī*, 2vols., Baḡdād, 1971
Saḡnūn, Saḡnūn b. Sā īd (d.240/855), *Al-Mudawwana al-Kubrā*, 6vols, Baḡdād, n.d.
al-Sanī ānī, Abū Sā d ʿ Abd al-Karīm b. Muḡammad b. Manšūr (d.562/1166), *al-Ansāb*, 13vols., Hayderabad, 1977
al-Saraḡsī, Šams al-Dīn al-Saraḡsī (d.490/1096), *Kitāb al-Mabsūt*, 30vols., Bayrūt, n.d.
al-Ṭabarī, Abū al-Ġā far Muḡammad b. Ġarīr (310/918), *Ta rīḡ Rusūl wa-l-Mulūk*, 3series, 15vols., Leiden, repr. 1964
Waqī , Muḡammad b. Ḥalaf b. Ḥayyān (d.306/918), *Aḡbār al-Qudāt*, 3vols., al-Qāhira, 1950

参考文献

- Brunschvig R., Le système de la preuve en droit musulman, *Études d Islamologie*, Paris, 1976, ii, 201-19
," Bayyina ", *EI*²
Cahen Cl., A Propos des Shuhūd, *Studia Islamica*, 1970. xxxi, pp.70-79
Peters R., " Shāhid ", *EI*²
Schacht J., *An Introduction to Islamic Law*, Oxford, 1964
Tyan E., *Histoire de l ʿorganisation judiciaire en pays d Islam*, Leiden, 1960, pp.236-42
," Le notariat et le régime de la preuve par écrit dans la pratique du droit musulman, Beirut, 1945
Wensinck, A.J., " Hudhud " *EI*²
Ziadeh, Farhat, Integrity (ʿ Adālah) in Classical Islamic Law, Nicholas Heer (ed.), *Islamic Law and Jurisprudence*, 1990, pp.73-93
Ibn al-Manzūr, ḡamāl al-Dīn Muḡammad b. Mukarram al-Ansārī (630H-711H) *Lisan al-ʿ Arab*, Būlāq, n.d.